「核兵器のない世界」という願いが現実になる時代

原　和人

IPPNW の世界大会は北京に次いで２回目でした。今回の会議、朝の８時から夜の１１時過ぎまで公式のスケジュールがあり、おまけに７時間の時差でクタクタになりながらも、眠気も飛んでしまう報告ばかりで、「核兵器の廃絶は可能だ」という、すごい熱気を感じました。

今回の IPPNW の総会には、世界各国から８００人の医師が集まり、最近にない盛会な大会になりました。その理由の一つは、今年５月に開催された NPT 再検討会議の結果でした。NPT 再検討会議では、核兵器禁止条約が始めて最終文章に記載され、期限こそ明確にされませんでしたが、核兵器禁止条約こそが、核戦争、核拡散、あるいはテロリストによる核兵器の使用などを防止する唯一の道である、という認識が広がりました。かつて、世界的な市民の運動の結果、生物化学兵器の禁止条約、地雷の禁止条約が成立したように、もっと運動を強化すれば、核兵器禁止条約は可能だという確信がみなぎっていました。

そのために ICAN キャンペーンを一層広げることが大切です。「やつらを信用するな」とは、地雷運動の教訓です。「地雷を廃止することは無理だ」と言った「やつら」です。「核兵器の廃絶なんて夢物語だ」「核兵器は抑止力のために必要だ」という「やつら」がいます。「抑止力とは相手以上力を持つ」ことです。限りない核兵器競争の道です。

スイスは戦後、核兵器の開発を行った国です。しかし、平和は力によって守られるものではなく、信頼によって達成できるものであることを理解して、核兵器の開発を放棄し、今日核兵器のない世界に向けて積極的な役割を果たしています。

スイスはまた、来るべき核戦争に向けて、各家庭の地下室に核シェルターを義務付けた時代がありました。核戦争が起こった３日間だけ隠れていれば大丈夫という前提です。残留放射線の影響も、核の冬などの気象に及ぼす影響も、何にも考慮されていませんでした。核戦争の愚かさを知ったスイス国民は、今、絶好のワインセラーとして使っているようです。

「核兵器は無くすことができるだろう。そうだよな。」「Yes　We Can」です。